

2. 流域の自然環境

2-1. 流域の自然環境

鳴瀬川上流域内には、都市近郊の山岳自然公園として舟形連邦がある。船形山を主峰として、前船形山、蛇ヶ岳、三峰山、後白髪山、泉ヶ岳などの群峰を有する、広大な山岳公園となっている。多くの山々が織りなす、すぐれた山岳景観に加えて鏡ヶ池、鈴沼、桑沼、白沼などの湖沼や溪谷、色麻大滝、薬菜山や七ツ森の火山岩頭など、変化に富んだ特色ある風景地がたくさん見られる。



舟形連峰の中心に位置する船形山/色麻町HPより

また、ハイマツ低木林、亜高山性落葉広葉低木林、ブナ低木林、ブナ林などの原生的な自然が残されており、豊富な植物を育んでいる。

明神堰から上流（50km～）の上流部は、山あいを流れる溪流の様相を呈している。魚類ではウグイ、ヤマメなどが生息しており、漆沢ダムの上流にはイワナも生息している。

新江合川合流点～明神堰（30～50km）付近の中流域は、瀬と淵が交互に現れる流れとなっている。特に三本木町～中新田町にはアユの産卵場があり、宮城県の条例で保護水面として指定され、産卵場が保護されているほか、サケも遡上している。河岸部にはヤナギ類を優占種とする群落が見られる。また、河道の蛇行部に広がる砂州にはヨシ群落が見られる。

鳴瀬川の河口～新江合川合流点（0～30km）付近の下流域は、広大な穀倉地帯の広がる大崎平野の間を緩やかに流れている。河道に点在する数多くの中州は、ハクチョウやガン・カモ類の越冬場所に利用されている。特に木間塚（14km）付近ではハクチョウの越冬地となっており、餌付けをする風景がみられる。魚類ではフナやウグイなどが生息する。河川植生としては、ヤナギ類が多く見られ、河口部付近の水際部には広いヨシ群落が分布している。



木間塚付近に越冬に訪れているハクチョウの群れ

一方、吉田川は魚類では、オイカワ、ウグイが多く生息しており、13km付近ではメダカも生息しているほか、サケも遡上している。

2-2. 河川及びその周辺の自然環境

鳴瀬川の河口部は、ハマナス、ハマニンニクといった砂丘性植物が見られ、エドハゼなど汽水性の魚類を捕食するウミウ、ミサゴなどが出現するなど、河口部特有の生物相を形成している。



ハマニンニク



ハマナス

フィールド図鑑 草原の植物 (東海大学出版会) より



ウミウ



ミサゴ
日本の野鳥 (山と溪谷社) より



鳴瀬川河口付近の状況/北上川下流河川事務所



鳴瀬川の河口付近の植生状況/北上川下流河川事務所

高水敷は全域に亘り、ヨシ、ツルヨシ、オギ群落が大半を占めており、オオヨシキリやヒバリなどの繁殖地となり、また、水際には魚類や昆虫類の生息地となるなど、鳴瀬川・吉田川の多くの生物の生息基盤となっている。



鳴瀬川の高水敷の状況/北上川下流河川事務所



鳴瀬川の高水敷の状況/北上川下流河川事務所

鳴瀬川・吉田川の水際には河口付近から直轄区間上流端付近までヤナギや河畔林（ハンノキ）がベルト状に生育しており、それが特徴となっている。このような樹林帯は、多種の陸上生物が利用している他、水中に垂れ下がったヤナギ枝葉の部分は、魚類や底生動物が増水時に避難場所となるなど、水生動物の生息場としても機能し、鳴瀬川の生態系を支えるひとつの要素となっている。



鳴瀬川の水際の状況/北上川下流河川事務所



鳴瀬川の水際の植生状況/北上川下流河川事務所

1 km～10km 間の背割堤防は鳴瀬川・吉田川の大きな特徴であるが、この区間の環境は、植生の多様性が乏しく一年生の草本が大部分を占め、鳴瀬川と吉田川に囲まれて閉鎖された区間であることから、両生類・爬虫類・哺乳類等の生息密度が薄い地区となっている。



背割堤防区間の植生状況/北上川下流河川事務所

鳴瀬・吉田川は、直轄区間においてはほぼ全域において河床が砂質であることから、速い流れを好むアユやヨシノボリ類の生息の場所となる早瀬や平瀬ができにくく、その数も少ない。そのため、上流部に存在する早瀬や平瀬は貴重な生息環境となっている。

一方、指定区間となる上流部は、山あいを流れる溪流の様相を呈しており、礫河床であることから早瀬や平瀬が多く、アユやヤマメなどの良好な生息場となっている。

鳴瀬・吉田川の直轄区間は、河床勾配が緩く流れが穏やかであることから、緩やかな流れを好むフナ類、コイ、ウグイ、ナマズ等の魚介類が生息し、水の流れの緩やかな深い箇所はハクチョウ、カルガモ、マガモなど冬鳥の越冬場所として利用されている。

2-3. 特徴的な景観や文化財等

2-3-1. 景観

鳴瀬川流域の特徴的な景観としては、先ず船形連峰が挙げられる。

県立自然公園船形連峰は、船形山を主峰として、前船形山、蛇ヶ岳、三峰山、後白髪山、泉ヶ岳などの群峰を有する広大な山岳公園となっている。多くの山々が織りなす、すぐれた山岳景観に加えて鏡ヶ池、鈴沼、桑沼、白沼などの湖沼や溪谷、色麻の大滝、薬菜山や七ツ森の火山岩頭など、変化に富んだ特色ある風景地がたくさん見られる。

さらに、ハイマツ低木林、亜高山性落葉広葉低木林、ブナ低木林、ブナ林などの原生的な自然が残されており、豊富な植物を育てている。



県立自然公園船形連峰を代表する船形山
(宮城県ホームページより)



ブナの原生林
(宮城県ホームページより)

また、鳴瀬川流域は、240km²にも及ぶ我が国数々の広大な穀倉地帯を有しており、いわゆる田園風景が広がる特徴的な景観を呈している。



鳴瀬川と大崎平野 (北上下流河川事務所資料)

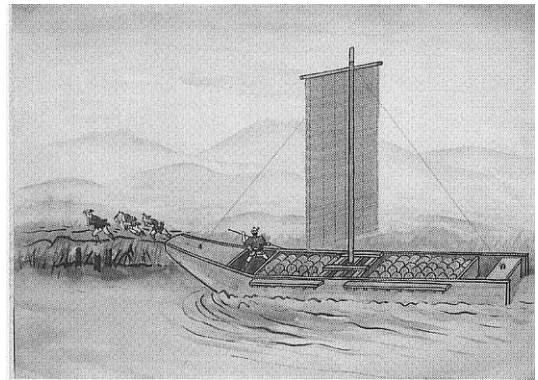
2-3-2. 歴史・文化

(1) 藩政時代

鳴瀬川流域は、藩政時代に「本石米」^{ほんごくまい}の舟輸送が栄えたところで、明治になっても、壮大な野蒜築港や日本有数の運河などで舟運が盛んであった。

藩政時代の鳴瀬川流域は、伊達藩の直領であり、その年貢米を、お蔵場に集積しそれを舟で搬出していた。当時の「ふね」は高瀬舟と称し、五十石以上二百石積位のもので、三本木より野蒜を通り、石巻港に至り、石巻から伝馬船に積み替え、江戸・大阪の伊達藩お蔵場に運んだと言われている。

当時の舟の漕法は、下りは川の流れを利用して棹をさし、上りは二・三人で棹をさし舟の方向を調節し、五・六人は川の北岸に沿って綱で引き舟をする原始的なものであった。三本木からは、米・酒・味噌・醤油等を積んで、野蒜・石巻に送り、上りは、稲井石・東名浜の塩を積んで来た。鳴瀬川の沿川は河岸と呼んだ荷物の揚げ下しする船着場があり、周辺には穀物の保管する買米蔵や本石米蔵など藩の蔵が置かれて、舟運の盛んな地域であった。



鳴瀬川のひらた舟（想像図）千葉文雄氏画
三本木の歴史（三本木町）より



現存するお蔵
三本木町ホームページより



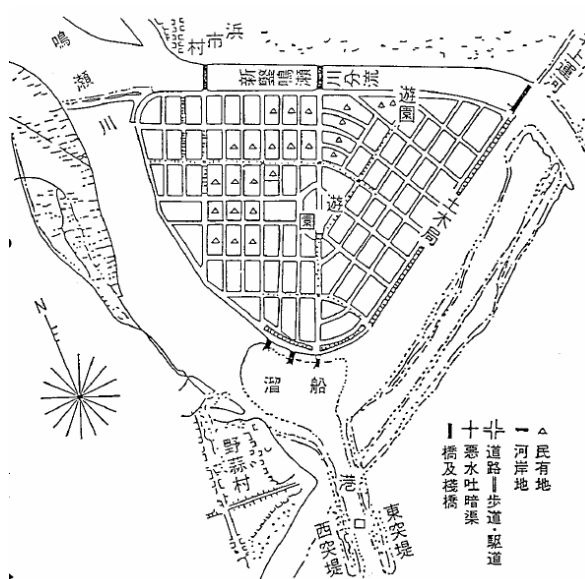
御蔵場・御本陣の図（明治19年に作成された図を基に再現）

御蔵場・御本陣（現在の三本木町）
三本木の歴史（三本木町）より

(2) 明治時代

明治時代になると、東北の発展を願って、鳴瀬川河口の野蒜築港を核とした国直轄の航路化事業が始められ、明治 23 年には北上川と阿武隈川が、東名運河・北上運河・貞山運河（貞山堀）によって結ばれた。

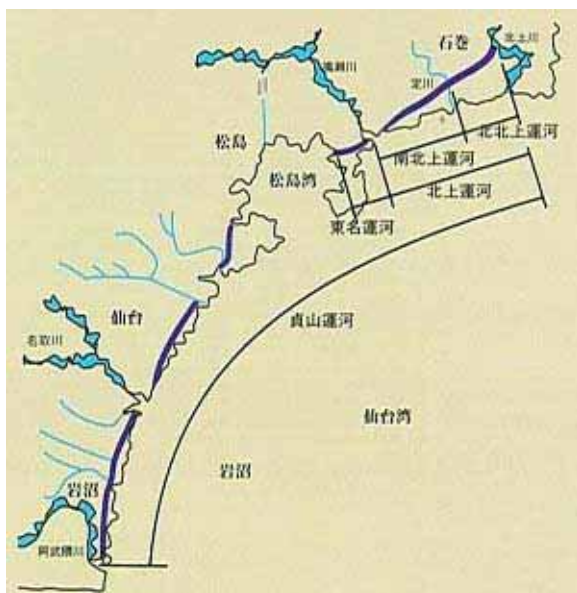
しかし野蒜築港は、明治 17 年の台風による完成間もない突堤の破壊や、再建のための財政的な問題もあって工事を中止せざるを得なくなり、今は幻となっている。



野蒜築港
 (「北上・東名運河辞典」より)



野蒜築港跡



運河網
 (北上川下流河川事務所ホームページ)



野蒜築港計画で建設された橋脚
 (北上川下流河川事務所資料)

(3) 大正から現代

明治時代に実施された野蒜築港は成功を見る事が出来なかったものの、元禄時代より営々と築いてきた治水対策により、名^な鱒^{れぬま}沼や品^し井^{ないぬま}沼の干拓など新田開発が行われ、鳴瀬川流域は我が国有数の穀倉地帯として発展をとげてきた。

このような歴史を受けて、近年では東北新幹線や東北縦貫・三陸縦貫自動車道などの整備により、益々、開発が進展する地域へと変貌をとげている。



実り豊かな大崎平野（北上川下流河川事務所資料）

(4) 文化財の状況

鳴瀬川流域に関わる国および宮城県指定の文化財の件数は、以下のとおりである。

表 2-1 文化財および記念物の一覧

種別		宮城県			鳴瀬川流域			
		国指定	県指定	合計	国指定	県指定	合計	
記念物	史跡	33	15	48	5	4	9	
	名勝	4	2	6			0	
	史跡及び名勝	1		1			0	
	天然記念物	27	26	53	1		1	
有形文化財	建造物	19	37	56	1		1	
	美術 工芸品	絵画	2	14	16		1	1
		彫刻	8	26	34			0
		工芸品	11	22	33		1	1
		書跡典籍	5	17	22			0
		考古資料	8	6	14		1	1
		古文書・古碑	1		1			0
歴史資料	2	11	13			0		
無形文化財	芸能			0			0	
	工芸技術	1	2	3			0	
	その他		1	1			0	
民俗文化財	無形民俗文化財	風俗習慣	3	10	13		4	4
		民俗芸能	3	31	34		4	4
		風俗慣習・民俗芸能		2	2			0
	有形民俗文化財		4	4			0	
合計		128	226	354	7	15	22	

※平成17年7月26日現在

出典：宮城県 HP (<http://www.pref.miyagi.jp/menu/534.htm>)

(5) 史跡

鳴瀬川流域の史跡としては、三本木町西部の丘陵斜面に築造されている日本北限域の装飾横穴である山畑横穴群（国指定記念物、三本木町）、奈良時代前半における陸奥国最大の官窯群である日の出山瓦窯跡（国指定記念物、色麻町）、8世紀前半に築かれた城柵跡である城生柵跡（国指定記念物、加美町）、7世紀末～平安時代の玉造郡内の中心的な官衙跡である名生館官衙遺跡（国指定記念物、古川市）、陸奥国賀美群衙と推定される古代の官衙遺跡である東山官衙遺跡（国指定記念物、加美町）がある。

これらの史跡は、鳴瀬川流域の歴史を物語る貴重な史跡である。



山畑横穴群（宮城県ホームページ）



名生館官衙遺跡（宮城県ホームページ）

(6) 天然記念物

加美郡加美町（旧宮崎町・旧小野田町）地内にある魚取沼にはイワナなどの魚類と共にテツギョが群をなして生息している。

このテツギョは、フナの突然変異種で、鰭が長く特に尾鰭の長いのが特徴で、その泳ぐさまが美しい魚である。全国の川や池でもごくまれに見られるが、魚取沼のように群れをなしている例はきわめて珍しく、学術的にもたいへん貴重な存在とされている。ブナの原生林に囲まれた面積約3.3haの魚取沼の周縁は、サワグルミ・ヤチダモの湿性林でかこまれ、ヨシ群落からマコモ・ミツガシワ群落が帯状に分布しており、テツギョはこうした良好な自然環境に育まれて、群生するまでに成育して来たものと考えられる。（テツギョ *Carassius carassius* 「コイ科フナ属の金ブナ的一种」）



魚取沼（宮城県 HP より）



テツギョ（宮城県 HP より）

(7) 民族文化財

鳴瀬川流域の民族文化では「御潮垢離（浜降り）」という神事が伝承されている。この祭りは、熊野神社の春祭りの行事で、海で拾われた御神体を神輿に奉じ、氏子が奉仕する行列を整え、獅子舞などの芸能連中も供奉し、延々と六日間にわたって鳴瀬川に沿って下る神事であり、21年ごとに行われる行事である。

かつて頼朝は、奥州平定後、東北の地（蝦夷地）に近畿・中国の農民を移住し開拓させたため、宮崎や鳴瀬川流域は、紀州からの移民が多く、これらの開拓農民が故郷の氏神を祀るため紀州の本社から御分霊を受け元応2年（1319）社司藤原重密が熊野神社として麓に祀ったといわれている。

この神事は、紀州の本社から御神体を社司藤原重密に授け海路により下向させた際に、途中常陸沖で暴風にあい漂流し、数日後桃生郡鳴瀬町浜市に上陸、その後、鳴瀬川をさかのぼって現在地に祀られたという歴史によるもので、当地に祀られてから23年目毎、（いつからか不明だが今は21年目毎）に行われる行事である。

最近では、平成3年4月に第21回目の御潮垢離の神事がとり行われた。